

神戸・愛徳学園高等学校

カンボジアの子ども思い

絵本作り

授業で生徒たちが手作りの英語の絵本を、カンボジア中央部の貧しい農村地域にある小学校に届けている高校が神戸市にある。愛徳学園高等学校(設立母体・愛徳カルメル修道会)が2022年に始めた「ブックプロジェクト」は今年で3年目を迎えた。先月、愛徳学園高校の教員3人が現地のブロン小学校を訪れ、今年3月に卒業した生徒たちの手作りの絵本7冊を子どもたちに手渡した。現地を訪問した松浦直樹校長(58)、佐々木敏子教頭(59)、同校生徒らから、同プロジェクトについての話を聞いた。

ブックプロジェクトに貢献する人材の育成は、各校が独自に設定できる学校設定科目の「グローバル・スタディーズ」で同校の3年生が取り組む活動の一つ。学年のほとんどの生徒が履修するというこの授業は、英語力の向上を目指すだけでなく、英語以外の教科担当(現地学習)に連関し、地球上で起きている課題、正義や平和について考える、教科横断・探究型の授業だ。「全ての

カンボジアとの出会い

プロジェクトが始まったきっかけは、佐々木教頭と荒谷すみれ教諭(共に英語科)が2019年、将来的に生徒をスタディーツアー(現地学習)に連れていく可能性を探るため、カンボジアに視察に行ったことだった。教頭たちはこの視察で、カンボジアでは学校の教育が行き届いておらず、特に貧しい農村

地域では女性と子どもを学校に通わせるよりも、農作業の手伝いをさせることを優先する傾向がある。大人たちが農作物を町に売り行つて、収入を得るためだ。もう一つのきっかけは、佐々木教頭が21年と22年の2年間、日本の公益財団法人の支援の下、日本とカンボジアの教員協働による「グローバル教育プロ

グラム」構築に関わったこと。

他校やカンボジア人教員を含む教員チームで、それぞれの学校現場での課題を分かち合いながら、英語を使った互いに学びがある授業がつけられないかを話し合った。

そこに参加していたブロン小学校の教員が「カンボジアの小学校でも週に1度英語の授

業があるが、良い教材も図書室もない」と話した。それを受けて、グループで考え出したのが「日本の生徒が英語で絵本を作り、カンボジアの職業訓練校の学生が現地のクメール語で翻訳を付け、ブロン小学校に贈る」活動の流れだった。これを愛徳学園では「ブックプロジェクト」として、22年からグローバル・スタディーズ」で取り組むことになった。

絵本ができるまで

生徒たちは初めて、ブロン小学校の状況やカンボジアの歴史を学ぶ。受け取る相手のこ

卒業しても学びの種

佐々木教頭はこの2年半の取り組みを通じて、初めはやや受け身の生徒もいるが、カンボジアの子どもたちの現状を知り、学びが進むにつれて、「相手の立場に立って考えられる」ように変わっていくのを感じたという。

加えてグループ作業の中で、生徒たちは自分の役割、貢献できるポイントに気が付くとも感じている。



愛徳学園高校から贈られた手作り絵本を読むカンボジア・ブロン小学校の子どもたち

夏休み明け最初の授業では佐々木教頭が、写真や動画を交えながら、ブロン小学校がどのような所にあるのか、児童らの様子やカンボジアの公教育が抱える課題、ブックプロジェクトが果たす役割などを生徒たちに話した。

松浦校長はブロン小学校を訪れた時、子どもたちが一斉に集まって額を突き合わせ、大きな声で絵本を読み始めたことと振り返る。ブックプロジェクトは、カトリック精神に基づいて愛徳学園で日々行われている「種まき」

生徒たちの声

9月5日の3時間目、生徒たちに①佐々木教頭の話や写真・動画からの気づき②今作っている絵本の内容③ブックプロジェクト全体を通じて学んだことを、オンラインで聞いた。

①については多くの生徒が、自分たちブロン小学校の子どもたちの教育環境の格差を実感したと答えた。「日本よりもブロン小学校の子どもの方が学ぶ意欲がある」「カンボジアを訪問した先生たちが、先輩方の活動をつないでくださっている」と感じた生徒もいた。

②は友情や旅、民族衣装をテーマにした話、日本の昔話に着想を得た話、日本文化や関西の都市を紹介する話などさまざま。共通していたのは絵本を受け取る相手のことを考え、喜んでもらえるような工夫を第一に作業を進めていることだった。

③では、自分たちには当然のように学ぶ機会がある。そのことへの気づきと感謝、絵本がブロン小学校の子どもたちの学びの助けになることへの期待と喜びが華がった。また文化の違いを知ることができたなどの声もあった。



カンボジアで現地カンボジアの生徒とオンラインインタビューする生徒たち。左端が荒谷すみれ教諭